

次の文章は、夏目漱石の小説『彼岸過迄』の一節である。「僕」と従妹の田口千代子は、幼いうちに「僕」の母が将来の結婚を申し入れた間柄である。父の死後、母は「僕」と千代子との結婚を強く望むが、「僕」は積極的に千代子を求めようとしない。以下の文章は、田口家の別荘を「僕」と母が訪れた場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。(2008年度 本試験)

田口の叔母は、高木さんですといって丁寧^{ていねい}にその男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊^しまった血色のいい青年であった。年からいうと、あるいは僕より上かもしれないと思ったが、そのきびきびした顔つきを形容するには、是非とも青年という文字が必要になつたくらい彼は生氣に充^みちていた。僕はこの男を始めて見た時、これは自然が反対を比較するために、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうかと疑^{うたぐ}った。無論その不利益な方面を代表するのが僕なのだから、こう改まって引き合わされるのが、僕にはただ悪い洒落^{しゃれ}としか受け取られなかった。

二人の容貌^{ようぼう}が既に意地のよくない対照を与えた。しかし様子とか応対ぶりとかになると僕は更に甚だしい相違を自覚しない訳にかなかった。僕の前にいるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血族ばかりであるのに、それらに取り巻かれている僕が、この高木に比べると、かえってどこからか客にでも来たように見えたくらい、彼は自由に遠慮なく、しかもある程度の品格を落とす危険なしに己を取り扱う術^{すべ}を心得ていたのである。知らない人を怖^{おそ}れる僕にいわせると、Aこの男は生まれるや否や交際^{こうさい}場裏^{じょうり}に棄^すてられて、そのまま今日まで同じ所で人となつたのだと評したかつた。彼は十分と経^たたないうちに、凡^{すべ}ての会話を僕の手から奪^すった。そうしてそれを悉^{ことごと}く一身に集めてしまった。その代わり僕を除^のけ物^{もの}にしないための注意を払って、ときどき僕に一句か二句の言葉を与えた。それがまた生憎^{あいにく}僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にする事も出来ず、高木一人を相手にする訳にもいかなかった。彼は田口の叔母を親しげにお母さんお母さんと呼んだ。千代子に対しては、僕と同じように、千代ちゃんという幼馴染^{おとこなじ}みに用いる名を、自然に命ぜられたかのごとく使った。そうして僕に、先ほどお着きになった時は、ちょうど千代ちゃんと貴方^{あなた}のお噂^{うわさ}をしていたところでしたといった。

★ここまでを読んで、登場人物の関係図を、下のサンプルのように

ノートに作成してみよう。

(語り手である「僕」が「高木」をどう見ているかは、丁寧に捉えよう。)

